

雪山童子 of 段

「色は匂えど 散りぬるを 我がよ 誰ぞ 常ならむ

有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず」

釈迦牟尼仏の 説きおきたまえる み教えと そのお悟りの 顛末を 語りまするは にわか仕立ての琵琶法師 愚凡釈とでございます。さてこの席は 釈迦成仏の本と為る、過去世の修行。インドではジャータカと呼ぶ 物語。生死輪廻のその中で、無量の功德、積み重ね、その甲斐あって、世に出でて、釈迦牟尼仏と示してぞ、無上の悟り開きます。ジャータカは、釈迦牟尼仏の前世に限り、ボーディサッタと呼びました。数ある話のその中で、「いろは」の歌の元となる、雪山童子の物語、語ることは致しましょう。

ハイリ

はるか昔の物語。釈迦牟尼仏は或る時に バラモンの 少年として、この世に住しておりました。ヒマラヤの山懐で 修行重ねた ことにより 雪山童子と名づけれます。さてその頃は、先の如来のカーシャパ仏が亡くなって、すでに久遠の時を経て、無仏の時のその中で、仏の教えは忘れられ、無明の闇が 覆う中、まことの道を 請い求め、想いを凝らし 禅定に 常に励むは 雪山童子。さてそれは、ある日のことでありました。

びょうびょうと吹く 風の中、微かに聞こゆ、歌の声。童子は耳を そばだてて、その歌声を聞き取れば

(擦り撥・今様の譜)

擦り撥・今様の譜)

「全てのものは 常ならず これ生滅の 法にして」

「全てのものは 常ならず これ生滅の 法にして」

その歌は、これまでに聞いた言葉のどれよりも、童子の心 揺さぶった。譬えて言えば、重い病に苦しむ人が、勝れた薬得たような。海原に漂う人が、救いの船を得たような。砂漠に迷う旅人が、オアシスの水、

得たような。久しくて故郷に帰り、昔の友に会うような。心に響く歌の聲。さりながら その歌は 一つの偈頌の 上の句で 下の句を欠くもどかしさ。雪山童子は 禅定の座より起ち、髪を掻き揚げ 歌声の主求めて 見回すに、それと思しき その場所に 恐ろしげなる 一匹の 羅刹の姿……。羅刹といっても 何のことやら分からぬと 思う人には 解説付きの親切さ。羅刹とは、インドではラクシャスという鬼のこと、音を写して羅刹よ訳す。さてこれで、閑話休題、

さてその様は、ザンバラ髪は炎のごとく、その間より 覗くは二つの金壺眼、耳まで裂けた 口からは 鋭い牙を むきだして 野獣のように 身構える。

クズレ四

さてその時に 雪山童子は 怖さを忘れ 羅刹の前に 歩み出て 羅刹に 問うに、

「御身は一体 何処にて 仏の説かれた 真理なる その上の句を 習われたのか。」

羅刹の言うに、

「俺は今、久しい間飲み食いできず、腹を空かして やり切れぬ。」
童子がさらに 告げるには、

「御身がもしも 我が為に その下の句を 説くならば、一期をかけて 御身の弟子と なりましょう。御身の歌う その偈頌は 半ばで終わり その意味も 明らかならず。何故に 下の句を 歌われません。」
羅刹の言うに、

「腹が減っては 歌う事すら ままならぬ。さりながら、俺が食うのは ただ人間の 生の肉、俺が飲むのは ただ人間の 生血だけ。」
雪山童子は、考えに考えた末。心を定め、羅刹に告げて、

「御身がもしも 下の句を 歌い終え 私がそれを 聞いたなら、我が身体 御身の為に 施しましょう。」
羅刹答えて、

「お前がまさに その身体 捨てることが できるなら、お前の為に 下の句を 説き述べようぞ。」

さてその時に、雪山童子は 身にまとう 鹿革の 衣を脱いで 地に
広げ 説法の間を 設えた。羅刹は童子に 相對し、歌の下の句 説き
述べた。すなわちそれは、

「生滅すでに 果てぬれば 心鎮まり 安らけし」

童子は歌を聞き終えて、そこやかしこの あるいは石に あるいは壁に
あるいは木々に あるいは道に 聞き得た歌を 書き残す。とはいふも
のの 今の時代の落書きは 立派な罪となることを どうかお忘れ
なきように。

さてその後には 雪山童子は 高い木立に よじ登り 地上めがけて
身を投げた。

クズレニ

地面に落ちる その前に 虚空の中に 様々に 童子を讃える 声
あつて、先の羅刹は 身を変じ 帝釈天の 姿と為って 空中で 童子

の身体 抱き止めて 地上に置くと 童子の足に 額を以って 敬礼
し 称えて言うに、

「汝は実に ボーデイサッタに 他ならず。後の世に 必ずや 無上
の覚り 成就されましよう。 汝がまさに 命を賭して 得られた歌は
カーシャパ仏の 教えにて その理は 次のよう、

「全てのものは 常ならず これ生滅の 法にして
生滅すでに 果てぬれば 心鎮まり 安らけし」

雪山童子が 得た歌は 日本の国に 伝えられ 今様の譜に 改め
られて 「いろは」の歌と なりました。

「色は匂えど 散りぬるを 我がよ 誰ぞ 常ならむ

有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず」

語りましたる 一段は 雪山童子の物語 続きの段は 何れまた
次のご縁と致しましょう。